

表紙 「ゴンドラの船着き場」 (ベネチア)



川野 奈津子 [三浦組 長願寺門徒]

東京都大田区蒲田に生まれる。
小学生の頃に「国際学童水繪展」にて受賞して以来、長年に渡り絵画を楽しんでいる。
「日本水彩展」、「上野の森美術館・日本の自然を描く展」で入選。
2014年には個展も開催した。
趣味のハイキングを縁に『新ハイキング横浜支部ニュース』の表紙を掲載し続け、
『新ハイキング』（新ハイキング本部発行）の口絵としても掲載された。

Shinran
850th
800th

—〈2023年 宗祖親鸞聖人御誕生八百五十年・立教開宗八百年 慶讃テーマ〉—

南無阿弥陀仏
人と生まれたことの意味をたずねていこう

東京教区教化委員会報 ネットワークナイン

発行日 2022年9月1日

編集 教化委員会広報・出版部門

「ネットワークナイン」班 編集員
総編集長：本田 彰一（東京1） 副編集長：田上 翼（茨城1）
チーフ：中村 晃（茨城1）
佐々木誠信（東京4） 朝倉 俊隆（東京5） 五島 大地（東京8） 小田 俊彦（茨城1） 大山 信敬（茨城2） 佐々木 萌（長野5）
チーフ：平松 正宣（東京3）
坂東 性悦（東京2） 櫻田 純（東京6） 秦 顕生（湘南） 和田 祐樹（三浦）
チーフ：田宮 真人（東京8）
土岐 孝広（東京1） 内藤 友樹（東京1） 渡邊 尚康（東京3） 鞠川 卓史（湘南） 服部 崇一（湘南）

発行 真宗大谷派東京教区教化委員会
〒177-0032 練馬区谷原1-3-7東本願寺真宗会館
TEL. 03-5393-0810 FAX. 03-5393-0814 Email. nw9@ji-n.net

ご意見、ご感想は上記連絡先までお願いします。

もくじ

宗祖親鸞聖人御誕生八百五十年・立教開宗八百年慶讃事業

- 03 定例法話配信スタート!! 土肥 真
特集
- 05 教区お待ち受け大会 記念講演
- 15 法語ポスター
教区教化通信 同朋の会推進部門
- 16 推進員後期教習
教区教化通信 研修部門
- 18 秋安居
教区教化通信 研修部門
- 20 聖典学習会 「正信偈」に学ぶ
教区教化通信 青少幼年部門
- 22 青年のつどい in 江の島
教区教化通信 「同和」協議会
- 24 「現地学習会」 金森 純
(京都市内フィールドワーク) 中川 和子
組の現場から
- 26 東京3組同朋大会
はい!こちら真宗会館です
- 28 駐在日記 渡邊 誉
はい!こちら真宗会館です
- 29 所員のつぶやき 福嶋 晃基
はい!こちら真宗会館です
- 30 人事異動
- 31 涌 田上 翼

南無阿弥陀仏

人と生まれたことの意味をたずねていこう

定例法話配信がはじまります!!



教区慶讃事業企画運営委員会

教化推進部会委員

土肥 真 (茨城2組 光照寺)

「教区でも御法話を定期的に発信できないか」との部会内での意見を受けて、教区としての定例法話配信 (YouTube) を教区慶讃事業として始めます。是非、これを機

会に様々な法話を、インターネットを介して聴聞いただければと思います。

この事業の目的は、まず新型コロナウイルスの蔓延によって、寺院等に身を運べない方々に、聴聞の場を確保することにあります。また、時代の流れによりインターネットを使用した動画等が数多く公開されている昨今、浄土真宗の教えを幅広くお伝えすることにあります。さらに、教区内の方々と短時間の法話ながらも、共に伝える力を研鑽していきたいという願いもあります。

さて、部会の会議では、この配信について様々な意見が交わされました。事業の名称やターゲット層、法話時間配分や動画編集スキル等々、話し始めると課題は多岐に亘りましたが、初めての試みでもあり、とにかく一歩

を踏み出そうということになりました。名称についても様々な意見をいただき、まずは「教区慶讃事業 定例法話配信」として開始いたします。法話の時間も3分〜5分とし、視聴されやすい時間配分を設定いたしました。また、法話者について、まずは教化推進部会委員から始めることとし、今後は教区内の方々に幅広くご出向をいただくこととなりました。

私も、真宗会館に於いてカメラに向かってお話をさせていただきました。内容はさておき、原稿を全文作成 (約1500文字) して臨みました。カメラの前で話すのは、やはり違和感があります。何度も原稿に目を落とし、度々、カメラ視線を意識できませんでした。撮り直しも行い、動画の確認を行います。また、ご一緒に話をした方や担当の宗務役員と、法話時間や話し方を確かめました。法話の動画は編集チームに預けられて、講題や字幕・オープニング映像等を入れて配信されます。

短い時間の法話ではあっても、いざ話す側になると、話すことが聞法なのだと思います。自分がどれだけ聞けていないのかということが知らされ、姿勢が問われてきま

す。話してみても、書いてみて、表現してみても教えられる。

「玉石混淆ぎよくへきまじりょう」と言います。とても素晴らしいお話があれば、私のような足りないものもありません。磨かれても輝かない石もありま

すし、輝いていたものがくすむこともあるでしょう。そのことに気付かされ、立ち返らせていただく場に仏法がはたらいているのだと思います。自他の評価に惑わされながらも六字のお名号を御本尊とし、話し手と聞き手が共に聞法する空間を、オンラインにおいても創出して参ります。

また、インターネットの利用についても、サポートが出来るマニュアルがあります。教区内寺院や教務所までお問い合わせください。なお、週に一度のペースで配信していく予定ですが、教区としては初めての取り組みでもあります。不具合等もあることと思いますが、一人でも多くの方へ届けられることを願っております。

また、御法話のご依頼もさせていただきます。声がけがありましたら、是非ともお引き受けいただけますようお願い申し上げます。

定例法話配信

スタート!!

ご報告の通り、「教区慶讃事業 定例法話配信」がYouTubeに於いてスタートします。東京教区YouTubeチャンネル（左記QRコード）よりご視聴いただけます。チャンネル登録も是非よろしくお願いいたします。

【法話配信予定】

8月31日（水）18時より配信スタート!!
以後、毎週水曜日18時に動画がUPされます。共に聴聞いたしましょう。



東京教区YouTubeチャンネル



宗祖親鸞聖人 御誕生八百五十年・立教開宗八百年慶讃法要
東京教区 500カ寺からつながる お待ち受け大会 記念講演

特集

「親鸞聖人の立教開宗に起つ」

講述：池田 勇諦 師



2023年・春、真宗本廟（京都・東本願寺）において、「宗祖親鸞聖人御誕生八百五十年・立教開宗八百年慶讃法要」をお迎えするにあたり、去る2022年6月13日、「東京教区お待ち受け大会」を開催いたしました。

前号ではオンライン配信の拠点となりました真宗会館の様子、また各寺院でご門徒と共に視聴参拝を行ったサテライト会場のインタビュー記事を掲載いたしました。

今号では、池田勇諦師（三重教区桑名組西恩寺前任職）の講演「親鸞聖人の立教開宗に起つ」を掲載いたします。

慶讃法要の意義

本日は、皆さんにおかれましては大変ご苦
労さまでございます。

コロナ感染症の拡大が、未だに収束しない
状況のなかで、私たちはいたずらに恐れるば
かりでいることは許されません。何よりも、
この逆風から問われておる大切なことに向き
合っていく、それが私たちにとって今、一番
大切なことなのであります。川柳で「コロナ
禍で 無神論者になった友」というのがあり
ましたけれども、本当に今、この逆風の中で
私たちは、「汝は、如何なる仏を拝んでいるの
か」「念仏に救われるとは、どういうことなの
か」と容赦なく問いただされてきているので
はないでしょうか。

親鸞聖人の御誕生八百五十年、浄土真宗が
開かれて八百年の慶讃法要もいよいよ明年に
迫りました本日、東京教区のお待ち受け大会
がもたれたことでございます。よくよく自問
いたしてみますと、私たちがご法要をお迎え
する覚悟に立つことを、実はご法要そのもの
から待たれています。親鸞聖人ご自身からお
待ち受けされておるのではないかということ
に気づくことが、今、私たちの最も大切な一

点だと思われれます。そこにおいて、私たちは
一人ひとりが願われているのです。今回お勤
まりになるご法要の意義、そして、それに遇
わせていただく者としての責任・使命に、ど
うかひとつ立ち上がってくださいと、深く願
われておるのであります。

ですから今日のこのお待ち受け大会は、私
たちに願われた、「お待ち受けくださっている
お心にお応えをする」意味において、ご法要
をお迎える私たちの覚悟のほどをしつかり
と見極めたいと思うことでもあります。本日与
えられたご勝縁を皆さんと共に、尽くさせて
いただきたいと思えます。宜しく願いをい
たします。

さて、私たち一人ひとりにとって今回のご
法要が何なのかということについて、慶讃法
要の「慶讃」という言葉によってはっきりと
告げられておるのではないかと感じます。皆
さん方もご承知でありましょうが、この「慶
讃」という言葉は、親鸞聖人が『正像末和讃』
の中で、「慶喜奉讃」という四字でお示し
になられていることに基づいております。し
かも親鸞聖人は「慶喜奉讃」ということの意
味について、二下寧に「おひだりがな(左訓)」
を打っておられます。「よろこびて、ほめたて

まつるべしとなり」。このお心からしますと、
「慶喜奉讃」ということは、「知恩報徳」とい
うことと全く重なることではないか、という
ことが知られるのであります。恩を知り、徳
を報ずるということですね。「如来大悲の恩徳」
「師主知識の恩徳」に遇わせていただいた者
は、その恩徳に生きる歩み・生活を賜るので
す。それが今回は、御誕生八百五十年・立教
開宗八百年という大切な節目の年に立つて、
改めて一人ひとりが確認をさせていただくと
いうご法要であります。

それで、これをより簡潔に申しますならば、
慶讃の「慶」は「恩徳、教えに遇わせていた
だいた喜び」、「讃」は「その喜びを伝える責
任」。ですから、「遇えた喜び、伝える責任」
というのが「慶讃」という言葉に込められた
願いなのです。

ですから私たちはその事をしっかりと踏まえ
て、このご法要をお迎える姿勢を確かめさ
せていただきたいと思いますのです。

立教開宗のお心

そこで、親鸞聖人によって立教開宗された
浄土真宗のお心について、皆さん方と聞いて

参りたいと思います。

従来、「立教開宗」と言った場合、「果たして親鸞聖人にそのようなお心があつたのだろうか」という疑問が出されてくるのですが、確かに、それがいわゆる「宗派」の意味、「セクト」レベルの意味であるならば、親鸞聖人にはそうしたお心は全く見られません。毎年、報恩講に拝読され、拝聴させていただく『御伝鈔』の中に、一つはつきりしたお言葉がありましたね。

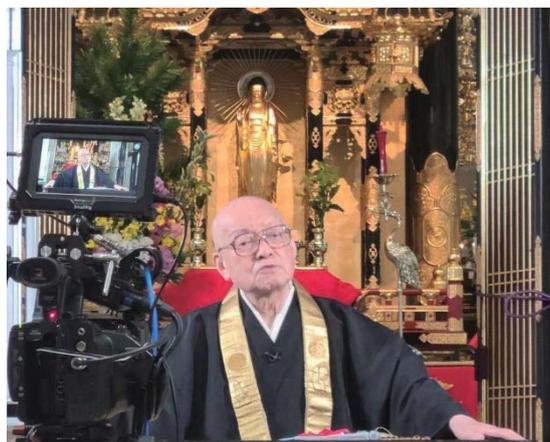
忝かたじけなく彼の三国さんごくの祖師そし、各此このの一宗しゅうを興行こうぎょうす。所以このゆえに、愚禿ぐとく勸すすむところ、更さらにわたくしなし。

『真宗聖典』七三五頁

「三国の祖師」とは七高僧のことです。親鸞聖人はひたすら師教を聞思する姿勢に徹していかれたのであります。

ならば、そのような親鸞聖人に立教開宗を仰ぐということは一体どういうことなのでしょう。それは、親鸞聖人における仏道の選び、丁寧に言えば、恩師法然上人によっておこされた選せん択しゃく本願念仏ほんがんねんぶつの仏道、浄土宗を浄土真宗と開顕かいかげんされたという事、まさしく「こ

の道一つ」という仏道の選び、同時に歩み出された事実を告げていることでもあります。



立教開宗の年時

そのことが代表作の『教行信証』にはつきりと表明されているわけです。

今日、唯一現存する親鸞聖人のご真筆本しんぴつほんでありますのが「坂東本」で、私たちが日頃用いております『真宗聖典』の『教行信証』の底本になっております。その「坂東本」を拝見すると、総序の文が終わりました次ですね、標宗ひょうしゅう（『教行信証』の宗要）の13文字が見

えております。

大無量寿経だいむりょうじゅきょう 真実の教 浄土真宗
『真宗聖典』一五〇頁

立教開宗は文字通り「教に立ちて宗を開く」ということです。今ほどの「大無量寿経、真実の教に立脚して浄土真宗を開く」ということの表明です。これが親鸞聖人における明らかな立教開宗の表明でなくて何でありましょうか。ですからこの『教行信証』の成立年時をもって、浄土真宗の立教開宗年時とするという了解であります。これは極めて自然な形だと言わざるを得ません。

ところが、この『教行信証』の成立年時の問題が、歴史的には今日も未だ決着がつかず、定まらないままであります。

では歴史的にはどのあたりまで明らかになつていのでしょうか。遡れば、親鸞聖人の七百回御遠忌法要（昭和36年）がお勤まりになつた時のことです。その七百回御遠忌をお迎えるにあたってこの「坂東本」が国宝に指定され、そして初めて解体修理されました。その解体修理の結果、「坂東本は草稿本ではあつても、初稿本ではない」という指摘がされ

たのです。つまり「坂東本」は原稿、下書きの本に違いなければ、初稿本ではない。それまでに既に出来ていた原稿を転写されたのが「坂東本」だといわれたのです。そういうことで、この初稿本の成立時期を『教行信証』の成立時期と考えるならば、『教行信証』は元仁元年の年時に関わらず、広く関東時代の御制作と言う他はない。こう報告されているのです。

ですから今後、新しい資料が発見されて、より明確な成立時期が報告されるまでは、結局歴史的にはこの年だというような、決定的なことはいえないという状況にあるのです。そうした中であって、今申しました元仁元年という年記ですが、『教行信証』の第六巻「化身十巻（本巻）」の終わり近くのところ

我が元仁元年甲申

『真宗聖典』三六〇頁

と見えておるわけでありませう。それで従来、親鸞聖人は元仁元年のこの時、『教行信証』のこの辺りを書いておられたのではなからうかと推察されてきております。

それからもう一つ、元仁元年という年時は、

恩師法然上人の十三回忌に相当する年なので、親鸞聖人にとってはとても大切な年でありませう。だからその大切な年を期して至徳報謝の心で、『教行信証』を製作されたのではないだろうか、これまた推考されておるわけなのです。そういうことで、元仁元年という年記がいち早く指摘され、今日まで伝承されてきているのです。

けれども今お聞きいただいたように、歴史的には元仁元年の年時に限りなく、広く関東時代の成立ではないかといわれておりますから、申し上げた通り、更なる説が出てくるまでは、今の定まらないままの状態で行くしかないのです。その中であって、今申し上げた元仁元年の説がいち早く指摘され、今日まで伝承されておるわけですから、真宗教団連合の共通理解ということにもなっており、真宗各派において元仁元年説に基づいて、慶讃法要が勤められておることでもありませう。

親鸞聖人の仏教史観

『教行信証』の成立年時を浄土真宗の立教開宗の年時とするということから、いちはや



く注視された元仁元年が西暦で言うところと1224年です。明年が2023年で立教開宗八百年に相当するということなのです。

それでは親鸞聖人における立教開宗とは何か。それが聖人における仏道の選びであることとを一言しましたが、ここで改めてその内実を確かめたいと思います。

それについては従来種々論ぜられていますが、今はその繁を避けて私なりに簡潔に申し上げるならば、「親鸞聖人における全仏教の歴史を見る眼がひらけた」こと、つまり、親鸞聖人における仏教史観の開頭に他ならなかったのではないかとことです。そのことを

支える大切な言葉が『未燈鈔』のなかに見られます。

浄土宗のなかに、真あり仮あり。真とい
うは、選択本願なり。〈中略〉 選択本
願は浄土真宗なり。〈中略〉 浄土真
宗は大乗のなかの至極なり

『真宗聖典』六〇一頁

これはものすごいお言葉ですね。「浄土真宗は大乗の教えの極まりだ」とはつきり言い切っておられるのです。このお言葉が、自宗の優越性を云々するといった質のことでないことは、言うまでもないことです。むしろその様な分別が内から突き破られて現れ出た「選択本願という眼」から全仏教の歴史が如來の選択本願のご苦労として、「親鸞一人がためなりけり」と受けとめられたのです。

これが親鸞聖人の仏教史觀の開頭のもつ意味であったに違いありません。ですからすでに申し上げたように、親鸞聖人の仏道の選び・真実の仏道の第一歩が明らかになりました。それが親鸞聖人における立教開宗の内実でなかったかと、私は申し上げたいことであります。

ここで一言申し添えておきたいことがあります。日頃私がよくお尋ねを受けることの一つに、「今日仏教教団の中でどうして浄土真宗だけが『般若心経』を読まないのですか？」というのがあります。けれども、今私が申し上げていることからすると、それは極めて明瞭な事柄なのです。

なぜかと言いますと浄土真宗は、「一切経を読み取る『選択本願という眼』を明らかにする浄土三部経を、正依の經典として読誦するのです。ですから他の經典は読誦しませぬ。しかしそれは他の經典を無視するとか軽んじると言うことではないのです。今申し上げた、一切経を読み取る『選択本願という眼』がはつきりしたことに於いて、初めて一切経を真実の意味で尊重するということが成り立ったのです。

この事は、蓮如上人が『御文』の中に一言言っておられますね。皆さん方が日頃読んでおられるところでないでしょうか。五帖目第九通「当流の安心の一義というは」のおしまいのところでは、

一切の聖教といふも、ただ「南無阿弥陀仏」の六字を、信ぜしめんがためなり

といふころなりと、おもふべきものなり。

『真宗聖典』八三七頁

蓮如上人はこう仰っておられます。この御心からすると、一切の経論釈は親鸞一人に南無阿弥陀仏をとどけるためのご苦労であつたと、きつちり統一されたということです。一切経を外に眺めて、「まあいろいろ説かれてあるなあ」と、そういう見物沙汰のことではありません。親鸞聖人は、あらゆる人間の問わねばならない問題を、親鸞一人において問いたすねられました。それが親鸞聖人の求道・仏道であるわけですから、その仏道を選び取った、決定したということが、一切経を読み取る眼が開かれたということなのです。

その点についてもう一言、私の受け止めを申し添えますと、昔の宗学者が残された言葉に、

一切の中の三部を学ぶべからず、三部の中的一切を学ぶべし

(法霖1693・1741年)

というものがあつた。一切の中の」とい

のは一切経のことです。「一切経の中の浄土三部経を聞くのではない、浄土三部経の中の一一切経を聞くのだ、学ぶのだ」と、こういうこととあります。これはすごい言葉だと思いません。親鸞聖人における仏教史観の開顕されたお心を、よく伝えておるお言葉でなかるうかと受けとめております。

そういうことで、繰り返しになりますが、親鸞聖人における立教開宗とは、自らの仏道の選び、「この道だ」と決定し、踏み出された第一歩、真の出発点ということとあります。

生まれてきたことの意味を問う

そのように確認をいたしますと、ここで今一度自問しなければなりません。それは、そのような立教開宗の精神というものが、私たちにとってどのような歩みとなって表れるのか、ということとです。つまり立教開宗の主体的な意味です。これまでは客観的な側面も含めて申し上げてきましたけれど、ここで改めて主体的な意味の確かめをしなければなりません。

そのことについて今回は何と言いましても、親鸞聖人のご誕生を讃えるという視点から聞

かなければならないと思います。というのはそれによつてはじめてご誕生を喜ぶことと立教開宗を仰ぐことが私にとって一つのことになるからです。

では自らに問いましょう。親鸞聖人がお生まれになったことを「寿ぐ」ということは、自分にとっていかなる課題でしょうか。いかにして、そのようなことが私の上に成り立つのでしょうか。そうなると実は、今回のご法要の「南無阿弥陀仏 人と生まれたことの意味をたずねていこう」というこのテーマが如実にその内実を私たちに教えてくださっておるのではないのでしょうか。

このテーマをよくよく見つめますと、何かこう、伝わって来るものがあります。親鸞聖人のご誕生を喜ぶということは、何よりも、わが身が生まれてきたことの意味を問いたずねることではないでしょうか。言い換えれば、自分が生まれてきたことが受け取れるか受け取れないかが問われている課題ですね。テーマがそれを如実に告げてくださっていることが感じられます。

けれども、実際に私たちの日常感覚からはそのようなことは考えたこともないし、考えてみようとしたこともないのではないでしょ

うか。ですから私は、このテーマに「南無阿弥陀仏」と掲げられてあるのはそこだと思うのです。南無阿弥陀仏のご縁を何らかの形でいただかない限りは、これが私の問題意識にならないということです。つまり南無阿弥陀仏のご縁に触れて初めて、わが身の問題・課題になってくるということを見せているのではないのでしょうか。

私たちの人生というものは、私の夢とか計算とか、そういうものを超えて厳肅に運ばれております。ですから、思わぬことが自分に起こることがあるのです。

それは何かといえは、ある日ある時、忽然として、自分の生きる意味を問う瞬間が現れるということとです。南無阿弥陀仏はそういう形で私に現れてきてくださるとも言えるわけであります。人はそれぞれに、それぞれのご縁をいただいて、そして遂には親鸞聖人と向き合うというご縁が与えられるのです。

そこで初めて、「親鸞さま、あなたが生まれてくださったおかげで、私は人と生まれた大仕事を気づかせてもらいました。それは自分の狭い殻を出て、縁あるままに、人に会う、仏に会う、広い世界を知ること、このことひとつを私はあなたの言葉を道として一生懸命

たずねてまいります」と、初めて親鸞聖人にお礼の言葉が言える。そして挙足こぞく一步いっぽの歩みだしをいただいた。ここにおいて初めて阿弥陀仏は、もはや「信ずる対象」ではなくて、「信ずる主体」であつたと言えるのではありませんか。

阿弥陀仏を信ずる対象だと思っているのは教義字の話です。私たちの自我ごんじの分別ぶんべつで阿弥陀仏を思い描いて、向こうに眺めて、それをこちらから押andoおるといふ、そういう形であるならば、阿弥陀仏と言ったところで、要は私の要求と期待の対象でしかないのです。ですからそれが満たされなかったら、「神も仏もあるものか」と「ポイ捨て」がオチになります。それこそ先ほどの「コロナ禍で 無神論者に なった友」という川柳が他人事ではなくて自分のことだったとなってくるのでしよう。

自我を主体として生きる私たち

コロナ感染症が拡がりだして3カ月か4カ月後だったと思いますが、自坊の伝道掲示板に私はこう書いたのです。

コロナ感染症の拡大は 世間は禍わざわいという 仏法は宿業しゅくごうという 宿業は現実の解釈語ではなく 向き合った自覚語だ

これは本当に大事な点ですね。私たちは聞法において「宿業」ということは聞かされると、自我の分別によつて、いつの間にか現実を解釈する言葉にすり替えてしまっている、変質させてしまっている。だから「宿業」なんていうことを言った場合は、「アキラメの捨て台詞」か、あるいは「差別」の助長に顛落てんらくするか、でないでしょうか。

「宿業は現実の解釈語ではなく 向き合った自覚語だ」とまず書きまして、その翌月に書いた言葉が、

感染症を拡げたのも人間 終息させるのも人間 人間は人間の作った文明ウイルスで苦しむ この現実に向き合っていく真の主体 それが南無阿弥陀仏でした

でした。南無阿弥陀仏はそこから逃れる話ではない、真剣に向き合っていくことのできる

主体なのです。私たちは、その主体＝南無阿弥陀仏との出遇いですね。これは私がよくお話しすることの一つなのですけれども、同朋会運動を提唱してくださった当時の宗務総長の訓くわん覇ぱ信しん雄ゆう先生ですね、その訓覇先生の厳しい言葉を思い出さずにはおれないのです。

これは先生の極めてご晩年ですが、私どもの報恩講にご法話に来ていただいた時のことです。お話が済んで控え室へ戻っていた時、一人の男性がツカツカと入ってこられて「先生、やっぱり分かりませんわ」と、こう言われた。私は、この方は訓覇先生の教えを日頃ずっと聞いていらつしやる方だなど思いました。すると、その方が続けてこういうことを言いました。「先生、いくら聞かしてもらつても分からん私は、もう地獄行きですわ」と。言った途端、先生から反射的にきびしい一言が返ってきた。「おまえなんか地獄へ行くか」。絶口。その場におりました私は本当に飛び上がりばかりにびっくりしました。そうでした。本当にそうでした。地獄へ行くのは仏だけです。凡夫は絶対に行けません。行けないどころか、逃げるだけ。だから、地獄に「落ちる」しかないのです。

振り返ってみますと、私たちは自我を主体

として生きておりますから、エゴです。自分に不都合なことであるならば、もう逃げられるだけ逃げて、どうしても逃げられないところだけをやむを得ずというか、仕方なく生きているというのが実態なのではないでしょうか。それが、自我を主体として生きておる私の実相だということです。

このことを現代の場でもう一つ確かめてみますと、亡くなった作家の司馬遼太郎氏が残された、これは遺言ともいわれる一言が思い出されます。それは「美しき停滞」。これが遺された一言なのです。この言葉に学びます時、現代において取り組まなければならない課題というのは、もはや「発展」ではなく、「回帰」あるのみということ。そうではないですか。科学技術の驚異的な発達というものは、個人と世界を貫いて、欲望の追求・拡大に走らせ、そして、自然・環境破壊はおろか、人間破壊にまで及んだことです。今やもう「滅亡に向かつて進歩・加速する人間」と言われたり、「絶滅種、人間もついにそれに数えられ」と言われるほど、人類に未来はないかと嘆かせられる今日の状況と言って過言でないのです。ですから、そこにおいて仏法に遇わせていただいております私たちは、人間の終わりの危

機を知ることによって、かえって人間の始まり、人間存在の成り立つ原点に目覚めて挙足一步することが出来る。それが私たちに与えられている功德ではないでしょうか。

では、先ほどの回帰ということ。申せば、どこへ回帰するのか。それが親鸞聖人が生きられた同朋の世界、同朋社会ではありませんか。我も人も共に同一のいのちの眞実、南無阿弥陀仏のいのちに繋がっている「根源的連帯」そこに回帰することです。

そこで初めて言えることがあります。皆さん方ご記憶があるでしょうか。平成10年に蓮如上人の五百回御遠忌法要が勤まりました。あの時のテーマです。「バラバラでいっしょ差異を認める世界の発見」とありました。生活、言語、習慣、あらゆる差異を持ったままで共に生きていくことのできる道が、あたえられていたではないですか。

私はここで確認をしたいのですけれども、何か仏法を聞くというのと、とにかくみんな精神論だと勘違いをしてしまっている。心の持ち方や、心の状態、自分の心の起伏、そういったことをいつも話題にする。聞法というのはそういう観念的なことではないのです。この存在が持つ、いのちの眞実に目覚めるこ

となのです。精神論ではなくて、存在論だということ。私はいつも申しておるのですが、この存在が持ついのちの眞実に目覚める時に、私という存在は決して「単なる一人」ではなく、「あらゆる関係によって成り立っている一人」、関係的存在。同朋社会を生きるものとして在ることが浮き彫り化されます。「万物同根なるがゆえに。万物一体なり」の仏智見の言葉どおり、根源的つながりを知る智見こそ、眞実の主体、仏智ですね。

緊張関係として歩む

ここが一つ見えてまいります時、私はこう申し上げずにいられません。

すでに同朋社会にありながら／差別社会を生きる日々／この矛盾を親鸞さまにあぶりだされ／差別を作る人間や社会と／切り結んでいく感覚をいただく／その歩みの他に「同朋社会の顕現に努める」生活は無い／

とこういう歩みが始まるのです。

自我を主体として生きている私たちが仏法

を聞くということ、言い換えれば、親鸞聖人の立教開宗のご精神に生きるということは、自我の主体がどこかへ片づけられるという話ではございません。私はこう申しておるのです。「立ちすくむ そのときどきに 射す光」。私が生きておるといことは、自我いっばい煩惱いっばいで生きていくということですから、自我を主体としている限り、いつも「立ちすくむ」ことがなくなるなら、ぶつかり、つまづき、惑うのです。そういう局面にいつも出遭います。

だからこそ、そこでもう一つの主体、真実の主体としての南無阿弥陀仏が、私となつてくださるといことが知らされるのです。その南無阿弥陀仏が来てくださる、その来かたというのが、何かを掴むとか貰うということではありません。今ほど申し上げた「立ちすくむ そのときどきに 射す光」ということです。

ですから信心ということについて、親鸞聖人は「一念の信」と仰るでしょう。ひと思いの信なのです。つまり一瞬の信なのです。一瞬射す光として来てくださるのです。そういう来かたなのです。もう掴みました、という話ではないのです。「立ちすくむ」から、そ

こで一瞬射す光。真実の私になつてくださる。「ああ、そうだったな」と一瞬気づかされる。けれどまた次の瞬間には自我の主体に立つている。だからまた、一瞬の光として道が来てくださる。まさに「一念の信の反復」です。反復相続が始まるのです。

私は、本当に仏法が分かるということはこれだと思ふのです。「自我の主体が片づけられて真実の主体一つになる」なんてとんでもありません。私が生きていく限り自我いっばい、煩惱いっばいです。相手を困らせて生きる、それが実相です。

だからこそ、そこで何が起きるかといえは、自我に立つか仏智に立つかという、この「緊張感」です。この緊張感が起こつてくださる。このことの他に、立教開宗の南無阿弥陀仏のところに生きるあり方はないに違いありません。

私たちの生活に、そうした緊張感をいただいていくことの喜び、有難さをこそ感じていきたい。

ですからその意味で、初めに申し上げます「遇えた喜び・伝える責任」というものは、まさに緊張感の歩みが与えられていく相^{すがた}です。今回のご法要に遇わせていただいて、

このこと一つを自らの使命として確認し、「遇えた喜び・伝える責任」を親鸞聖人のご尊前にご報告申し上げる御法要といたしたいことでございます。

最後にもう一度、立教開宗の精神に生きるということ、これは私たちにとつてどうということかを申し上げます。私にとつて立教開宗とは、「南無阿弥陀仏を真実の主体（私）として生きることであります」。その具体的な歩みが、こだわつてお話しして参りました、緊張感を生きる生活であります。ありがとうございました。



お待ち受け大会を終えて



教区慶讃事業企画運営委員会

お待ち受け・法要部会主査

須賀 力つとむ (東京5組 道教寺)

宗祖親鸞聖人八百五十年・立教開宗八百年慶讃法要東京教区お待ち受け大会が、6月13日に「東京教区五〇〇カ寺からつながるオンラインお待ち受け大会」として開催されました。

この大会は、様々な不測の事態を想定し、4月に本会当日のご講師である池田勇諦氏のご自坊（三重教区西恩寺）にて事前録画の撮影を行い、讃歌合唱のTokyoサンガ9の

皆様にも事前の録画をお願いし、おみがき等行い当日に臨みました。

本会は渡辺智香のりか慶讃事業企画運営委員会委員長の開会の辞にはじまり、門首挨拶・勤行と続き、この日のために制作した東京教区各組の紹介VTRが流されました。

また内局からは尾畑英和参務の挨拶があり、その後、記念講演に「親鸞聖人の立教開宗に起つ」のテーマのもと、池田勇諦氏にはオンライン・ライブ配信にてご自坊よりご法話を頂戴しました。

ご法話のなかで、「慶讃」を「出遇えた喜びと伝える責任」と言われ、来年お迎えする慶讃法要に向けて一歩あゆみだそうではありませんか！と強く呼びかけられました。

その後、柴崎光あきら東京教区慶讃事業企画運営委員会副委員長の閉会の挨拶があり、Tokyoサンガ9が「恩徳讃」を斉唱し散会となりました。

当日の東京の感染者数は1000人に満たない数字でしたが、2023年にお迎えする宗祖親鸞聖人御誕生八百五十年・立教開宗八百年慶讃法要をはじめ、2025年にお迎えをする「東京教区慶讃法要」が以前のように、真宗会館に人がつどい、「御齋おとぎ」や「おしるこ」

がふるまわれ、笑顔や談笑が絶えないつどいとなりますことを切に願うものであります。

当日の視聴数はZoomでの参加数は約100件、YouTubeの最多同時視聴数約300件を数えました。その後、YouTubeアーカイブは約2900件(8月10日現在)の視聴を数えています。今後、期間を限定してご講師の池田勇諦氏の法話はアーカイブにて視聴できますのでご活用ください。ようよろしくお願いいたします。

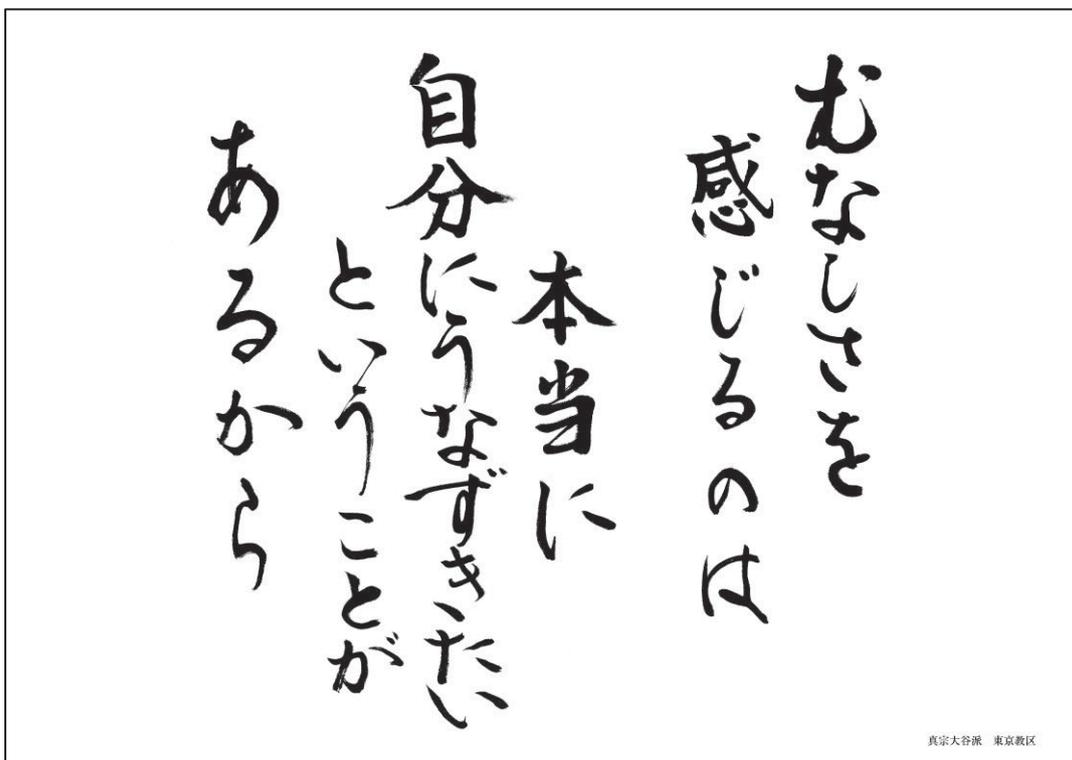


南無阿彌陀仏
人と生まれたことの
意味をたずねていこう

教区お待ち受け大会はYouTubeにてアーカイブ視聴することができます。左上のQRコード、もしくは教区HPからどうぞ。

https://www.youtube.com/watch?v=k_alMpWkg_I

今月の法語



書：佐藤 多仙

- ・頒布中「掲示伝道用ポスター」(A2 サイズ)
「掲示伝道ポスターミニ」(ポストカードサイズ)
- ・「掲示伝道用ポスター」が貼れる門徒宅用掲示板を無償設置いたします。
詳細は東京教務所まで。

教区教化通信 同朋の会推進部門

推進員後期教習

同朋の会推進部門幹事 藤谷 真之

当部門では、同朋会運動の願いのもとに、推進員教習を開催しています。この教習は、東京教区教化委員会が主体となり、教区内のご門徒を対象として、広く門戸が開かれています。実施内容は、真宗会館での前期教習（真宗入門講座・3日間）と、その修了者を対象とした、本山・同朋会館での後期教習で構成されています。ここでは、6月1日～3日に本山で開催された後期教習について報告をさせていただきます。

まず、講義は諸殿拝観から始まりました。教導の牧野豊丸先生（福井教区託願寺住職）から、「御影堂門の上には、釈迦三尊像があり、それはお釈迦様が『無量寿経』を説かれる会座を表しています。つまり、御影堂門をくぐるといことは『無量寿経』の教えをくぐって、そしてまたここから出ていくということなのです。つまり、教えを聞いた人が、自分の世界へまた帰っていく。教えをくぐって、教え

からまた出て行く。出て、入る」と御影堂門を前にして、お話しいただきました。

また、「親鸞聖人の教えは平等です。あらゆるものが阿弥陀如来の教えによつて平等である。ところが、この真宗本廟に象徴的に特別な人しかくぐれない菊門（旧称・勅使門）を作ってしまったのです。廟には精神・願いという意味が有る。親鸞聖人の教えを聞く我々が、それも大事な歴史としてどのように受け止めていくのかということが問われている」と示してくださいました。

そして、「真宗本廟へ身を運ぶということは、建物や歴史に触れることでその願いを受けとめ、教えを頂くという意味が有ります。そのことを通して自分はどうなのかと問われるのです」と諸殿拝観の大事な意味を教えてくださいました。なかでも「ともすると、わざわざ本山まで行かなくても、それぞれの地域の研修でいいのではないかと聞こえてきそう

だが、補導さんの問題提起と自分の問題意識、それが毎回違ってくる。だから、観光として見て回るのは違う」との言葉が非常に印象に残っています。

さらに、帰敬式については、「この受式はスタートです。法名を名告ること、人生の本当の意味での歩みが始まる。3つのたしなみ（朝勤め、同朋の会、報恩講）をやらずにおれない人、教えを聞きお勤めをする人を門徒と言うのです」と教えていただきました。

座談では、「門徒とは、教えを聞き、お勤めをする人」との言葉に刺激を受けた方が多かったように見受けられました。前期教習にて聞いた内容と、今回聴聞した内容を確認するよう、それぞれが受けとめたことをいただき直していただきます。

最後に、これからの生活指針となる「宣誓文」の作成では、聞いたことをどのように表現していくのか、参加者同士が白熱した雰囲気の中で言葉を紡ぎ出していました。

感染症拡大のため、待ちに待った3年ぶりの開催でしたが、同朋会館での感染防止対策もしっかりしており、安心して過ごせました。ただ、夜の日程を縮小した内容になっていたことが気がかりでした。前期も日帰りの日程

宣誓

真の門徒を目指して以下の
ことを行います

- 一、朝夕の勤行を大切に勤めます
 - 一、積極的に聞法に参加します
 - 一、聞法に出させていただく縁を感謝します
- 一、いただいた全ての出遇いを大切に
します

二〇二三年六月三日

東京教区推進員教習
修了者一同

今回作成された宣誓文

を強いられており、語り合う場が足りないのではないかと心配が最後まで残りませんでした。振り返ってみますと、前期教習にて武田定光先生から「門がみつきり、門の前に立つのが入門」、そして「あらゆることが莊嚴となり、問われる」と教わったことが思い起こされます。そして、後期では真宗本廟へ身を運び、門の前に立つ機会を得ました。そこで「教えと願い」、「歴史と課題」に触れることの大切さを感じながら、自分が問われる大切な縁となりました。その意味で、前期と後期教

習の課題の深まりと、その間のプロセス、つまり生活の中での「聞思」の重要性を感じた3日間でした。

【参加者の感想】

千葉組 淨眞寺門徒 山本 佳代子

今回たくさん先生方スタッフの方に支えられて、中身の濃い研修を受けることができました。ありがとうございます。

東京の真宗会館での前期教習をふくめ、コロナのために少人数での研修になりましたが、これはこれで、顔と思いがそれぞれに持っているものを逃げ道なくつながり話し続けることができ、かけがえのない機会をいただきました。

今まで他者と違う条件や無いものを数えて、「どうせ、どうせ…」と、やらない自分を嫌っていました。参加者同士で時間をかけ、丁寧につながり続けられたことで、他の人には無い機会をたくさん得てきた自分を喜ぶことができました。「できることを喜ぶ視点」を得られたことで、これからの日常の見える風景が変わると思います。ありがとうございます。



本山 記念写真

■推進員後期教習のご案内（予告）

期日 2023年6月17日〜19日

（2泊3日）

場所 同朋会館（京都 東本願寺）

※過去に「真宗入門講座」（推進員前期教習）を受講された方が対象です。

※詳細は、教務所（佐々木・立野）へお問い合わせください。

教区教化通信 研修部門

秋安居報告 第2回（全4回）

講師：延塚 知道 師（2021年安居本講師者）

講題：『大無量寿経』講讀・宗祖の視点で下巻を読む・



親鸞聖人の『教行信証』は『大無量寿経』（以下『大経』）の論書です。本来、論書は菩薩しか書けません。ですから、凡夫に論など書けるわけがないのです。しかし、『教行信証』は凡夫の論書です。その先駆けが『浄土論註』です。ですから、親鸞聖人は「註論」と言うのです。

親鸞聖人の正式な名前は「愚禿釋親鸞」です。『教行信証』に5回ほど出てきます。ところが「親」という字は略す場合がありますが、曇鸞の「鸞」だけは外さないのです。有名なところで悲嘆述懐の「悲しきかな、愚禿鸞」とあります。鸞の字を外さないのは、『教行信証』のお手本が、曇鸞の『浄土論註』である

からです。親鸞聖人は、曇鸞によって凡夫の論書を書く勇気をいただいたのでしよう。

凡夫が救われていく念仏ひとつを明らかにしたのは七祖の中で曇鸞がはじめてです。

『論註 下巻』の讚嘆門に「三不信」が出てきます。行巻や信巻の引用を読むとわかりませんが、曇鸞は凡夫が救われる行を明らかにしたのです。それが讚嘆門です。親鸞は、そこに立つのです。だから曇鸞は外さないのです。世親が「世尊我一心帰命尽十方無碍光如来願生安楽国」と言いますが、親鸞はそこを引用していません。「我依修多羅」から引用するのです。行巻を見てください。

『浄土論』に曰わく、我修多羅 真實功德相に依つて、願偈總持を説きて、仏教と相應せり、と。仏の本願力を観ずるに遇うて空しく過ぐる者なし。よく速やかに功德の大宝海を満足せしむ、と。

『真宗聖典』一六七頁

『浄土論』を「我依修多羅真実功德相」から引用します。はじめの「世尊我一心帰命尽十方無碍光如来願生安楽国」というところは、前の龍樹の弥陀章の偈にあります。だから、龍樹の弥陀章の偈が「世尊我一心帰命尽十方無碍光如来願生安楽国」を表すのです。そして、そのすぐ後に「我依修多羅」から引用するのは、龍樹と世親をひとつとして見ているのです。それは、龍樹と世親は菩薩としてひとつと見ているのです。

よく考えますと「世尊我一心帰命尽十方無碍光如来願生安楽国」は、「私は釈尊が説かれた『大経』を一心に信じます。釈尊が『大経』で説かれた尽十方無碍光如来に帰命して、その阿弥陀如来の世界に願生したいと思えます」と述べた世親の信心の表明です。それだけであつたら、信心の表明というだけで、行という意味はありません。それを曇鸞は、五念配釈で「帰命尽十方無碍光如来」が、行だと徹底してゆくののです。だから、五念配釈のここ

ろに「帰命尽十方無碍光如来」を持つてきます。それは、『大経』の行を、凡夫が救われる行として「帰命尽十方無碍光如来」と決定したのは曇鸞の讚嘆門であると言いたいのです。親鸞聖人はそこに立つのです。そして、行巻の大行釈に「大行とは、すなわち無碍光如来の名を称するなり」と曇鸞の讚嘆門の文章を持つてきます。そして、そのはたらきは「破闇満願」であるといひます。これも讚嘆門の文章です。

大行とは、すなわち無碍光如来の名を称するなり。この行は、すなわちこれももろの善法を摂し、もろもろの徳本を具せり。極速円満す、真如一実の功德宝海なり。かるがゆえに大行と名づく。

『真宗聖典』一五七頁

このように曇鸞は『大経』の行を決定すると同時に、それを中心にして凡夫の論書の先駆

けになりました。ですから、親鸞聖人は曇鸞を大事にするのです。

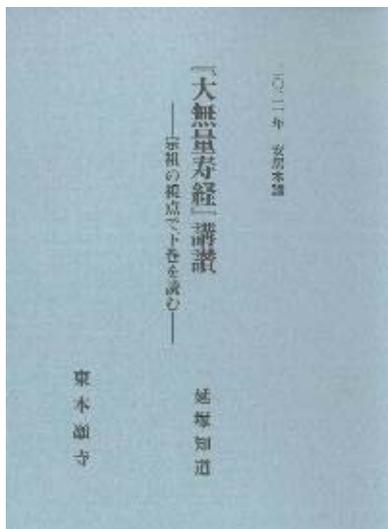
2021年安居本講

『大無量寿経』講讃

・宗祖の視点で下巻を読む・

著者：延塚 知道

価格：3,850円



※お問い合わせは東京教務所（担当：渡邊 まで

教区教化通信 研修部門

聖典学習会「正信偈」に学ぶ

講師：一楽真 氏（大谷大学学長）

「三忍」については、善導大師のお言葉があります。

〔序分義〕 また云わく、「心歡喜得忍」

と言うは、これは阿弥陀仏国の清淨の光明、たちまちに眼前に現せん。何ぞ踊躍に勝せん。この喜びに因るがゆえに、すなわち無生の忍を得。また「喜忍」と名づく、また「悟忍」と名づく、また

「信忍」と名づく。これすなわち玄に談ずるに、未だ得処を標さず、夫人をして等しく心にこの益を怖わしめんと欲う。勇猛專精にして心に見んと想う時に、方に忍を悟るべし。これ多くこれ十信の中の忍なり、解行已上の忍にはあらざるを明かすなり、と。

『真宗聖典』二四八頁

もとの『觀無量壽經』（以下『觀經』）を確かめておくと、

心歡喜故、応時即得無生法忍。

（心の歡喜するがゆえに、時にすなわち無生法忍を得べし。）

『真宗聖典』九五頁

とあります。ここを善導は「心歡喜得忍」という、これだけの文字で取っているわけです。「序分義」というのは序分の意味を解説するもので、実はこれが始まる前に「玄義分」が置かれている、これが非常に大事です。『觀經疏』と言っていますが、善導はその一冊目を「觀經玄義分」というのです。『觀經』の奥深い意味を表す部分です。善導は『觀經』のお言葉を註釈する前、「序分義」、「定善義」、「散善義」の前に玄義をはっきりさせないと、『觀

經』は読めないのだということ、**「觀經玄義分」といって『觀經疏』を始めておられます。**

その中に「得益門」があり、無生法忍を得るということについては、すでに「玄義分」で話題にされています。なぜわざわざ言うのか。

「時にすなわち無生法忍を得べし」とありますが、「時に応じてすなわち無生法忍を得」とも読めます。ここで無生法忍を得るのだと見る人もいたわけです。しかし、善導大師はここで得たのではないと「玄義分」で言うのです。時が来れば、無生法忍を得るのであることを予告しているだけであって、ここで無生法忍を得たのではないということです。

もう一つは

得見仏身 及二菩薩、心生歡喜。歎未曾有。廓然大悟、得無生忍。

（仏身および二菩薩を見たてまつることを得て、心に歡喜を生ず。未曾有なりと歎ず。廓然として大きに悟りて、無生忍を得。）

『真宗聖典』一一二頁

ここは、はっきりと無生法忍を得たと書かれ

てあります。ですから、ここで得たという人もいるわけです。だから初めの序分のところか、最後のこの部分でしか「無生法忍」という言葉が出てきませんので、ここで得るという見方が一般的なのです。

ただ善導大師は、ここは得た内容をもう一度確かめているところだと言っています。始めに無生法忍が出てくるところは、得るであろうということを示している。後のところは、得た内容が間違いなく無生法忍だということを確認する意味であって、ここで得たのではないというのです。

では、どこで得たのか。華座觀の前の部分（聖典一〇〇〜一〇二頁）です。善導はここで無生法忍を得たと言っています。これが善導の独自性として、どこで得たかというものは阿弥陀に遇ったその時だというわけです。

「無生法忍」というのは聖道の諸師方からすれば、菩薩道の第八地まで上って、ようやく得られるものなのです。凡夫には得られないはずのないものなのです。ですから、韋提希が無生法忍を得たということは、実は韋提希が菩薩であることを意味すると、諸師方は読んでいきます。

それに対して、善導は韋提希を、実際の業縁の中で苦しみを抱えた凡夫であると言い切ります。韋提希を凡夫と見ることによつて、『觀經』は凡夫のために説かれた經典であり、それはさらに仏滅後の凡夫も包むのだと善導は言います。諸師方はやはり菩薩道の位に上つていくことを説いている經典だと見る。その証拠に、韋提希は無生法忍までいっているではないかと言っていますね。そういうことが善導に先立ってあるものだから、善導はここでいう無生法忍を解説する必要があった。いわゆる菩薩道の中の高い境地に上つてからの無生法忍ではないということと言わなければならぬ。これが

また云わく、「心歡喜得忍」と言いは、これは阿弥陀仏国の清淨の光明、たちまちに眼前に現ぜん。何ぞ踊躍に勝えん。この喜びに因るがゆえに、すなわち無生の忍を得。また「喜忍」と名づく、また「悟忍」と名づく、また「信忍」と名づく。これすなわち玄に談するに、未だ得處を標さず、

『真宗聖典』二四八頁

と述べられます。どこで得たかというのは、お経には書いていないと言っています。韋提希は華座觀の初めのところで得たと、善導は言っているわけです。なぜなら、そこで阿弥陀に遇っているからだと言っています。そのことをここで解釈しています。「阿弥陀仏国の清淨の光明、たちまちに眼前に現ぜん」と。それがこのような世界があつたのかといふかたちで、「踊躍に勝えん」と、驚いて躍りあがるほどのことだと言っています。

（文責 研修部門）

今後の聖典学習会の日程

- ① 10月14日（金） 13時〜17時
- ② 12月9日（金） 13時〜17時

お問い合わせは東京教務所（担当…渡邊 楽）まで

教区教化通信 青少年部

青年のつどい in 江ノ島

去る6月14日、青年のつどいが開催されました。今回は江ノ島近隣の「ヘミングウェイ江ノ島」を会場にバーベキューを行いました。企画段階では、新型コロナウイルス感染再拡大の影響で開催が危ぶまれましたが、感染者数が減少していったことで無事に開催することができました。

当日はあいにくの雨天でありましたが、会場では屋根付きのテラスで食材を焼くことができ、室内で食事ができましたので、天候に関係なくバーベキューコンロで食材を調理して歓談を楽しむことができました。

参加者感想

東京5組 存明寺 酒井 あゆみ

今まで教区の企画に参加する勇気が出ず、今回初めて友人と参加させていただきました。最初は緊張していましたが、すぐに色々な方が話しかけてくださり、楽しく過ごすことが

できました。「どういう活動があれば参加したか？」など意見を聞いてくださり、自分のことを受け入れてくれる感じがとても嬉しかったです。これからは積極的に参加させていきたいと思います。ありがとうございます。

開教会 六縁寺 佐々木 健太

今回初めて参加しました。新たな繋がりができ、皆さんとの情報交換や日頃の取り組みなどが聞けて楽しい時間でしたし、勉強にもなりました。また参加したいと思います。

東京7組 了見寺 井口 弘寿こうしゅ

私は今回、青年のつどいに初めて参加させていただきました。きっかけは同じ組に所属している方からの誘いです。かなりの緊張しいということもあり、行きの電車から結構緊張していました。ですが、

いざ会場に着いてみると、皆さんとてもフレンドに話しかけていただき、とても楽しく有意義な時間を過ごさせて頂きました。今後ともこのご縁を大切にして、青少年部門全体を盛り上げていきたいと思えます。



あなたのお寺をサポートします!!

東京教区サポートプラン事業のご案内

同朋の会結成 サポートプラン



お寺の子ども会 サポートプラン



東京教区では上記、お寺のサポートプラン事業を行っています。新しく同朋の会、子ども会を始めたいと思っている。これまでの会をさらに充実させたいと思っている。そのようなご寺院に担当スタッフが伺い、それぞれのご寺院に合った会の形を一緒に考えていきます。まずは、東京教務所（担当：佐々木）までお気軽にお問い合わせください。



児童教化連盟

じれん

参加者・スタッフ

募集!!

春の遠足・夏のキャンプ・子ども報恩講を開催しています
 また、児童教化に関する研修会（年2回）も行っています
 お子様のご参加、スタッフとしてのご参加をお待ちしています



詳しい活動は
 ←QR (facebook) を
 ご覧ください

お問合せは児連事務局まで

〔東京教区児童教化連盟 事務局〕
 〒130-0012
 東京都墨田区太平2-7-1本明寺内
 TEL 03-3623-1536
 委員長 本田彰一（東京1組）
 ✉tokyojiren@gmail.com

教区教化通信 「同和」協議会

「現地学習会」(京都市内フィールドワーク)

2022年6月27日～29日京都市内において、2泊3日の現地学習会を開催した。新型コロナウイルスの影響により2年ぶりの開催となり、参加者は31名であった。

「現地学習会」を終えての感想

東京2組 徳念寺 金森 純

私は「同和」協議会委員となって初めて参加させていただいた。岩崎徹師の事前学習会では、目的が親鸞聖人の教えが賤民(被差別民)の存在抜きでは成立しないという事を知ること、とお聞きした。今まで教学を学ぶ上で賤民(こう呼ぶことに抵抗感があるが)との関係を強く意識したことはなく、委員となつてから「屠沽の下類」考」を学んでいるが、

あらためて興味深く感じた。平安時代から洛中にてくる賤民の河原人(者)、犬神人、それを支配している京職・檢非違使の話は絵図等の資料(岩崎徹師編の資料が秀逸で素晴らしい)を見ながらの丁寧な解説があり、当時を生々しく感じる事ができた。

現地学習会は梅雨明けの晴天で、親鸞聖人所縁の光圓寺から始まり、法然上人の御廟や吉水を訪ね、賤民の暮らした地を巡り、翌日は東市遺跡から空也上人、一遍上人の市屋の道場(金光寺)を見て回った。

中世を生きた親鸞聖人の眼に洛中に住む賤民の姿と、越後を含めてのりようしや農民の姿はどのように映ったのだろうかと思いのめぐらした。

終わりにこの学習会に参加できたことは親

鸞聖人を学ぶ上で大切な体験であり、企画した委員会や関係者の皆様には深く感謝申し上げます。

ところで前田副会長によると、初日は約一万七千歩、二日目は約七千五百歩であったという。参加の皆さん、自分も含めて炎天下の中、熱中症にならず良く歩いたとしみじみ思う。

三重教区三重組 常願寺 中川 和子

今回、教区外から初めての募集ということに、初日の講義では、当時の地図や現地写真付き資料をもとに、中世の文化と社会背景から「親鸞の言葉(教学)と歴史的現実(賤民の動向)」の関連性を詳しく学びました。

講義とフィールドワークで得た課題は「境界」とそれを利用した社会構造です。普段移動目的で通過する五条大橋は、親鸞在世においては現松原橋の位置にあり、川幅、道幅は現在より広く中州があった。そうした地形

（山・坂・河原を「境界」にして、神仏の領域（死）に関わる役職を生業とした賤民や癩者（ハンセン病や重度の皮膚病に罹患した人々）といった被差別民もまた京職や檢非違使に統括され、天皇を中心とした貴族体制の中に組み込まれていたといえます。

良（東北）の方角にある鬼門封じの枳殻邸の隅切り、京都の庶民の願いを背景にした庶民信仰の町堂、である因幡堂、同じく町堂である飢饉時に炊き出しの行われた六角堂、そして仏教信仰による貧民や病者、孤児の救済施設である悲田院（跡）を訪れました。鎮護国家というものと、施行という被差別民や庶民への救済が神仏供養として並存する社会に、現在の人道的支援とは異質のものを感じました。

「命の線引き」と「穏便な排除」で国を守る現代社会の国策と地続きに、市井の差別や偏見が根強く残り続けていることを、あらためて歴史から学びました。



教区 組ぞの現場から

東京3組

組同朋大会

東京3組 組長 青樹潤哉（専西寺）

去る6月25日、東京3組として初めての同朋大会が「お念仏を次の世代へ・同朋の輪を広げよう」をテーマに、福成寺にて開催されました。

当日は勤行を行い、長らく組門徒会長をお勤め頂いた佐拔邦一元会長（念速寺）の表彰、佐拔元会長の尽力を受けて新任職が立ち上げた念速寺同朋の会結成のお祝いと、対面ならではの温かな集いとなりました。



佐拔元会長の挨拶

記念講演は、草野顕之先生（大谷大学名誉教授）より、「戦国動乱と本願寺教団」と題

して、室町時代から江戸時代にかけて本願寺教団が関与した一向一揆や石山合戦および東西分派に関して、お念仏がいのがけで相続されてきた歴史を史実に触れながら丁寧にお話いただき、参加者一同ありがたい場となりました。

東京3組門徒会 会長 古西 正仁
（開導寺教会 門徒）

福成寺様におきまして、東京3組初めての同朋大会が開催されました。

約3年ぶりの対面での行事となり、久しぶりの勤行から始まり、佐拔元会長が教区門徒会員を7期21年間に亘りご尽力された功勞に対して、教区より佐々木駐在教導より表彰され、念速寺様で同朋の会が発足して活動を

開始したことに對しまして、提灯と上山旗が授与されました。

記念講演といたしまして、大谷大学名誉教授の草野顕之先生より「戦国動乱と本願寺教団」とのテーマで講演をいただきました。東西分派の理由について、実質的に二つに分かれてしまった本願寺を、江戸幕府は寺地寄進によって追認したという説を説かれました。厳しい念仏相続を継続するために、先代皆様のご努力してきた活動に、感謝しかないことに気づきました。



草野先生による記念講演の様子

教区の情報をおあなたに あなたの声を教区に!!

一緒にネットワーク9を作りませんか?

編集員募集中!!

Network 9

東京教区教化委員会報 ネットワークナイン

取材、原稿執筆、校正、デザインなど、紙面作りに関するすべてを行います。お寺の新聞やチラシを作る時のスキルも学べるかもしれません。パソコン初心者の方でも大歓迎です。先輩編集員が丁寧に指導します。一緒に楽しいネットワーク9を作っていきましょう。興味がある方、お問合せは東京教務所（担当：佐々木）まで

ネットワーク9へのご意見・ご感想をお寄せください
〒177-0032 東京都練馬区谷原1-3-7 東本願寺真宗会館内 東京教務所
【電話】(03)5393-0810 【ファックス】(03)5393-0814
【mail】nw9@ji-n.net

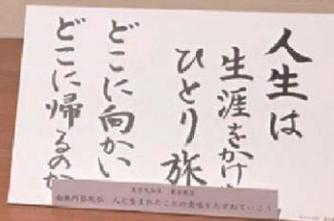


NEW

「**掲示伝道ポスター**」

ミニ

ポストカード



2017年度 A・B (2種類)
2018年度 A・B (2種類)
2019年度 A・B (2種類)
2020年度 A・B (2種類)

■各100円
各6枚入
簡易スタンド付き
はがきサイズ
送料250円
(場合によって500円)

東京教区教化委員会広報出版部門では、毎年掲示板に掲示いただくための「**掲示伝道用ポスター**」を発行しております。

このたび、生活の中でより身近に言葉に触れていただけるように、**ポストカードサイズ**の「**掲示伝道用ポスターミニ**」を発行いたしました!

ご寺院での行事の際に、ご門徒への記念としていかがでしょうか?

お申込み：東京教務所 (TEL03-5393-0810/担当:菊巒 (きくやま)) まで

はい！こちら真宗会館です

駐在日記



東京教区駐在教導

渡邊 誉

駐在からひとこと

最近読んだ本：『影の外に出る - 日本、アメリカ、戦後の分岐点 - 』片岡 義男 著

子どものころ海開きをする前から海で遊んでいた。岩場から飛び込んだり、海中深く潜って魚や貝を捕ったりしたこともあった。

8月、お盆が近づくと水温が下がり海水が濁る。同時にクラゲが大量に発生する。刺されるとかなり痛い。数日間腫れ上がる。それでも海で遊び惚けていた。

そんなある日突然、一緒に住んでいた祖母が「今日はお内仏の掃除をするから手伝うように」と厳しく命じてきた。言いつけを守りその日は海へは行かず朝から仏壇や仏具磨きをした。一段落つき、出かけようとする今度は「お昼からはお墓の草刈りだよ」。こういう時は不服そうな顔を祖母に見せてはいけない。後でこっ酷く叱られるに

決まっている。渋々蚊取り線香を腰にぶら下げ、鎌を持って歩いてお墓に向かう。実家の墓は家からそんなに遠くない場所にあった。あらかた終わり、やれやれこれで解放されるかなと思うと次は祖母の実家のお墓の草刈りが待っていた。「あーあ、今頃友達はみんな遊んでいるだろう、なぜ俺だけこんなことを」とショボくしていると山道から下りてくる同じように草刈り姿の友達と出会ってお互い苦笑いしていたのを思い出す。

作業が終われば畑で採れたじゃが芋で祖母お手製の粉吹芋がおやつに出た。これがまた美味しく疲れも取れた。

さて今度実家に帰ったらお内仏の掃除とお墓の草刈りをしてさらに粉吹芋作りにも是非挑戦したいと思う。

はい！こちら真宗会館です



首都圏教化推進本部

推進委員

福嶋 晃基



担当：親鸞講座、ココロダイアル、広報関係
最近見た映画：シン・ウルトラマン

最近、古着や古本といった、人からの「おさがり」をよく購入している。

古着との出会いは一期一会だ。気に入ったデザインのものがあったとしても、サイズまで合う服にはなかなか出会えない。それでも、自分に合ったものに出会えた時の喜びと、定価よりも安く手に入る嬉しさが癖になってしまい、古着屋めぐりが趣味になっている。古本屋めぐりも同じだ。何か欲しい本があって古本屋に行くのではなく、ふらっと立ち寄る。そこで、読んでみたかった本に出会えた時や、たまたま面白い本に出会えた時、とても嬉しい。自分に合った「おさがり」を探す旅がどんどんエスカレートして、先日はリサイクルショップで中古のソファを購入した。

私が子どもの頃は、「おさがり」というと、使い古した物を与られている

気がしてあまり好きではなかった。以前は、ソファを中古で買うことに対して嫌悪感を抱いていた。誰がどんな風に使っていたかわからない物に、偏見を持っていたのだ。しかし、誰かが大切にしていたものを譲り受けると考えれば、素敵なことのように感じる。私はこれまで、新品じゃないと嫌だという「こだわり」を持っていたのかもしれない。今では、そのソファも我が家の一部として生活に溶け込んでいる。

私は趣味でギターを弾いているのだが、今度は中古のギターショップでヴィンテージギターの購入を検討している。ここまでくると、定価より安く手に入りたいという「欲」や「こだわり」に縛られ始めているような気がする。

どこまで行っても「欲」と「こだわり」から逃れられない私がいる。

人事異動



離任

三重教区駐在教導

藤井 晃世



このたび、7月1日付けで三重教区駐在教導を拝命し、首都圏教化推進本部を離任することとなりました。

真宗会館には、2009年4月の着任以来13年間お世話になり、東京教区の皆様と一緒に「首都圏教化」に携わらせていただきました。

たこと心より御礼申し上げます。

真宗会館は「実験の場である」という諸先輩方のお言葉をよくよく噛み締めながら、時には叱咤激励を受けて、様々な新たな事業にチャレンジをさせていただき、そのことを通して「伝わる」ことの難しさと「求めている人がそこにいる」ということを、多くの現場で学ばせていただきました。

これからは、「三重教区」という地で、地域とお寺に根差した教化の現場に立って、そこで教えを求める人との出会いを大切にしながら、より一層精進して参ります。

今後とも変わらぬご指導を何卒よろしくお願いいたします。



【離任】

栗生 剛

東京教務所主事→財務部主事

(2022年8月1日付)

【着任】

益田 勇哲

組織部主事→東京教務所主事

(2022年8月1日付)

寺本 智真

山陽教区駐在教導→東京教区駐在教導

(2022年8月1日付)

【退職】

渡邊 誉

東京教区駐在教導

(2022年7月31日付)

次号にてご挨拶を掲載させていただきます。

敬弔

平松理元 様

東京5組 正徳寺 前住職
7月7日命終 73歳

雲井久美子 様

横浜組 真照寺 坊守
7月8日命終 78歳

前橋賢宗 様

長野3組 西念寺 前住職
7月23日命終 93歳

生前のご功労を偲び、
念仏合掌して哀悼の意を表します。

7月末日届出迄

涌ゆう

編集員の随筆



「あら、上手に箸持てるのね?」

「へえ、器用にハサミ使うもんだね」

子どもが生まれようとする時の、ただただ無事に生まれてくれさえすればと思っていた気持ちはどこへやら、その子が成長するに従って、あれこれと欲をかいいて注文をつけるようになる。そろそろ歩けるようになるだろうか、もう言葉話してもいい頃だ、近々、箸や鉛筆の持ち方、ハサミの使い方等も教えるければ…。

根底には、よその子と比べてうちの子は「ふつう」の範疇から逸脱してはいないだろうかという心配がある。親戚のあの子は◇カ月で歩き始めた、隣の家のあの子は△歳で箸が使えるようになった、等々、つい周りと比べてしまう。早い分には鼻高々であるが、遅いとなればそれが心配の種となる。「うちの子は『ふつう』だろうか…?」

そもそも何をもって「ふつう」というのかは大変あいまいである。強いて言うならば、

「みんなと同じ」ということであろうか。

浄土に咲く蓮の花は、「青色青光、黄色光、赤色赤光、白色白光」(『仏説阿彌陀經』)といわれ、それぞれが違った色のまに、光かがやいている。「みんなと同じ」だから正しい、というものでもないし、ましてやそれをもって「ふつう」であると考えるのはただの幻想である。本来、誰しもが個別の存在であって、私たちがつい考えてしまう「ふつう」などというものは存在しない。

「みんな」の意見や評価に飲み込まれて、自己や他者の本来性を無視して「ふつう」を押し付ける在り方になってはいないかと、振り返りが欠かせない日々である。

ところで、冒頭の2つの「」は、私が昔よく言われ、場合によっては成人を過ぎてからも言われた言葉である。左利きの私が、左手で箸を持ち、ハサミを使うことは、私にとつてはふつうのことであるのだが。

(茨城1組 一乗寺 田上翼)